

カトリック宮津教会

1896年に建てられたカトリック宮津教会は、教会建築のユニークな例です。ミサを毎週開催する教会の中では日本最古と見なされており、それより古い教会は長崎の大浦天主堂（1864年竣工）のみです。日本には16世紀半ばからキリスト教徒がいましたが、彼らは明治政府が1873年にキリスト教の禁止令を解くまで、密かに信仰を続けていました。

1885年に日本にやってきたフランス人宣教師であるジャン・ルイ・ルラブ神父は、宮津の教会の建設を監督しました。その土地はパリ外国宣教会から洗礼を受け、病気から回復したという地元の旧家の人物から寄贈されました。ルラブ神父はすでにこの地域に教会を設立しており、新しい建物の設計を担当することになりました。大工は、主に地元で調達された材料を使用し、西洋の建設技術の知識が限られている状態で建てました。

建物全体にロマネスク様式が見られ、また日本特有の特徴も数多くあります。車輪型の窓のステンドグラスとアーチ型の門が正面を飾りますが、この教会のドアは外側に開く代わりに、横にスライドさせて開きます。信徒席はなく、アーチ型の天井の下の畳敷きの床に信徒は座ります。身廊内の円柱は檜でできています。アーチ型の窓は、フランスから取り寄せられたステンドグラスで作られたカラフルな幾何学模様で教会の内外を飾ります。教会は、1927年の地震後の建物の表面の修理など、いくつかの改修が行われたものの、ほぼ建設当時のままの状態です。